

全国

長

南

会

通信

64号

事務局 : 300-0301 茨城県稲敷郡阿見町青宿 930 長南秀則 TEL/FAX

発行日 : 令和元年 11 月 05 日



写真 前列左から俊春会長、山崎純醒氏
後列、斉藤可南子さん、山本良子さん、秀則

義経北紀行伝説

通信 61号でご紹介した山本良子さんからの
お誘いで、「義経北紀行伝説」の著者である、
山崎純醒氏の講演会に俊春会長と私が参加し
た。夕方の講演会の前に、上野森鷗外ゆかりの
宿、水月ホテル鷗外荘で待ち合わせ、昼食会
での義経にまつわるお話等で過ごした後、上野精
養軒での講演会に参加すべく、上野山に向かっ
た。10月になったばかりでも、まだ暑さが残
る日だったが、晴天の上野は不忍池の風や、公
園の木陰には、随所に秋を感じられる夕暮れ
である。

山崎氏純醒氏は、岩手県在住で、義経北紀行
伝説を研究する団体「義経夢の会」の会長をさ
れており、歴史エッセイ、小説などの執筆活動
や講演会等を開催している。

今回の、山崎氏の講演会の内容は、源義経の

北紀行伝説で、義経は平泉で死なず、東北、北海
道を経て、中国大陸に渡った。そして、あのジン
ギスカンは義経本人である。という説をいくつか
の証拠を挙げて説明していたこと。それと付随し
て武将の名前（呼称）の説明も興味深い内容だっ
た。



写真 上野 水月ホテル 鷗外荘



義経蝦夷渡航図

義経は文治5年（1189）4月、衣川合戦により自刃。その御首は、焼酎に漬けられ、45日後に腰越（現在の鎌倉市）に届けられた。頼朝の重臣により首実検が行われ、義経は死んだとされたが、腐敗しているし、焼けたものであったので見分けがつかなかっただろうという。徳川光圀（水戸黄門）編纂の大日本史にも「この大暑中、いづくんぞ腐乱壊敗せざらんや．．．」と記されている。頼朝のなんらかの都合で義経を死んだことにしたのではないか。また、錦絵の蝦夷渡航図（写真）にあるように、本州（青森か？）から北海道に船で向かうところの様子が描かれているものがある。これも義経が平泉で死んだのではない証拠であると考えられる。錦絵は江戸時代後期から明治にかけて書かれているものが多く、その元になる資料があるはずである。



義経は岩手県、青森県を經由して北海道に渡ったとされている。東北、北海道には義経にまつわる地名や神社仏閣が残っている。岩手県（判官神社）、青森県（貴船神社、高館八幡宮）、北海道（九郎岳、義経神社、弁慶岬）などがある。それに、シベリアのナホトカの近くにハングワンという地名があり、判官義経の渡来の関連が感じられる。また、ナホトカの町にある建物には、笹りんどう（源氏の家紋）のようなものも発見されている。

ジンギスカン 義経成吉思汗説

中国には、義経の子が金（中国東北部。1115～1234）の将軍になった、と伝えるものがある。また、清朝編纂の古書にも、清朝は義経の子孫だ、と記されているという。それらの資料から、義経は北海道からさらに満洲に渡ったこと、さらに義経は満州からモンゴルに入り、そこでチンギス・ハーンになったと考えられる。チンギス・ハーンがモンゴル皇帝に即位したのは1206年。義経が平泉を脱出してモンゴルに定住して台頭したとすれば、年代的なつじつまは合う。また、モンゴルの軍旗や兜の紋章には日本の笹りんどう紋に似たものがある。笹りんどうといえは清和源氏、すなわち義経の家系の家紋である。



山崎氏によると、源義経は音読みでゲンギケイと読む。アルファベットでGENGIKEI。それをモンゴル式の発音ではチンギスと読んだ。それに汗（カン・ハーン＝王の称号）をつけたという。因みに、中国式で読むと chéng jí sī hàn チャンジスウハン。モンゴルは漢字がないはずなのに、成吉思汗という漢字が使われたのもチンギスハーンが日本人であることが想像されるという。清和源氏の旗は白旗だが、チンギス・ハーンの即位式には九棹の白旗が立てられた。これはチンギス・ハーンこと義経が、自分は清和源氏であることと「九郎」であることを示したと考えられる。



義経北行はなぜ沿岸ルートだったのか 沿岸ルートを選んだ7つの理由

1. 内陸（奥州街道）には、鎌倉方の縁者の住処が多くあったので、歩いていてところを目撃されたら、たちまち鎌倉に報が届き、北行旅は失敗する。
2. 沿岸ルートには、義経に味方する源氏の落武者が、流れて住処にしている者が多かったため、さまざまな援助が得られた。
3. 鞍馬寺の東光坊阿闍梨蓮忍をトップとする天台寺門流の寺院のネットワーク、常陸坊海尊を棟梁とする山伏集団のネットワーク、弁慶を棟梁とする出羽、羽黒、比叡山の修験者集団のネットワーク、良子御前を棟梁とする陰陽師とイタコのネットワーク、金売橋次を棟梁とする吉次屋敷のネットワーク、これらが沿岸部に張りめぐらされており、投宿、食糧、道案内、斥嵐攪乱、馬や船などの手配など、全てに渡って支援が得られた。
4. 沿岸には神社が多く、社殿の中で休憩や寝泊りするのに都合が良かった。（内陸のものは旅をしないので、情報が得られない）
5. いよいよ道が遮断されたら船で川と海をわたることができる。
6. 山の幸と海の幸の両方に恵まれ食糧に困らない。塩と生魚（ビタミン類が鳥目や脚気を予防）は、長旅に必須の摂取物であった。
7. 沿岸部は金山の宝庫であり、路銀の確保と備蓄をするためにも、沿岸ルート以外に選択の余地がなかった。

いみな 氏姓通称 諱について

義経の家臣に長南忠春という武将がいる。「長南氏の研究」の中村就一氏によると長南上総七郎菅原忠春が正式だが、長南は姓、七郎が通称、忠春を忌み名（いみな 諱）である。諱とは実名で、その人間の人格を表すものであり、それを敬う気持ちから、まともに呼ばないのを礼儀とする習慣があった。武士は元服とともに実名をつけられていたが、同時に通称も与えられ、通称のほうで呼ぶのが習慣になっていた。子どもが誕生した順に、長男を太郎や一郎とし、次男を次郎、三郎、四郎・・・十郎とつけ、それ以上を余一郎、余次郎、余三郎とつける。那須の与一は十一男であろう。太郎に子どもが生まれれば、小太郎、小次郎・・・であり、孫は孫太郎、孫次郎・・・。そのまた孫は、彦太郎、彦次郎・・・であったという。

義経は源義朝の九男なので九郎。正式名は、源伊予守九郎判官義経（伊予守は官職）。因みに松島湾寒風沢の長南氏のご先祖の名前は長南和泉守菅原道本であり、官職は和泉守である。

長南氏歴史物語より 中村就一

源平時代の長南氏

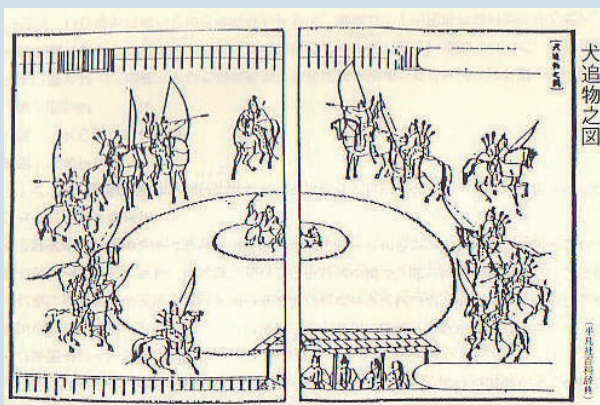
長南氏は上総介の支配する上総国の長南に、927年から住んでいましたので上総介に任命された人の多い千葉氏とは親しい間がらで両氏の間では縁組もしばしば行われたようです。千葉体系図を見ると、1074年に千葉常長の常末^{つねすえ}という人が、長南左衛門尉^{さへもんのかみ}の家へむこ入りして家をついだと書いてあります。この頃長南氏の若者は、1051年から始まった前九年の役や1083年からの後三年の役にも千葉氏の軍勢に加わって、東北地方の各地で戦いました。

そしてそのあと保元・平治の乱とつづいて兵馬が走り回るので世の中がさわがしくなりますが、1167年には平清盛^{へいせい}が天下を統一

して太政大臣になります。清盛は関東地方の平家の一部が新天地を求めて伊勢に渡った平家一族の出身です。

平治の乱に敗れた源義朝^{みなもとのかよしも}の子、頼朝^{よりとも}は伊豆半島に送られ、その弟義経は鞍馬寺にあずけられましたが、やがて寺を逃げ出して関東地方をかくれ歩いて家来を集めました。関東地方には源氏の仲間が多かったので、かなり集まったことでしょう。長南忠春もそのひとりです。

しかし、この地方に長くいるのも危険ですから、義経は1174年には忠春らをつれて、いまの東北本線沿いの奥州街道を北へ、平泉に向かって旅行しました。その途中、いま30世帯ほど長南氏が住む福島市松川町の浅川を通過したのも不思議な縁といえるでしょう。



1181年に鎌倉の由井ノ浜で行われた犬追物のようすを紹介しましょう。参加する人は毎回12人です。

回	犬の数	当たり数
第1回	7	6
第2回	7	5
第3回	7	5

第3回の選手に長南七郎頼基という武士がいて、みごと矢を犬に当てました。

見終わった頼朝が帰ろうとして、輿^{こし}（人がかつぐ乗り物）に乗ってから、ふと思いついて「もう一回見たい。今まで当てた者の中から選んでやってみよ」と命じました。

頼基も選ばれ、12名が第4回目の競技を争いました。このときは犬が10匹放されま

したが、頼基を初め10名が10匹に当てました。頼朝は、すっかり満足して引き上げました。頼基らはまさに百発百中の名人だったことがわかります。

頼基は千葉氏の一門の上総広常^{かずさひろつね}の家臣です

から、やはり長南出身です。このあと2年後に広常は誤解を受けて頼朝に殺されてしまいますが、頼基は千葉氏の軍勢の1人として頼朝の天下統一のための平氏との戦いで、その騎射のうでまえをぞんぶんに発揮し戦功をたてたのです。

長南忠春と長南忠清



江戸末期に武者絵では一流とされた一猛斎歌川芳虎の原画を芝神明三島町佐野屋喜兵衛が版元となって印刷した絵の中に一の谷合戦の図があり、その図には九郎判官義経のそば近く、今や鶴越の坂落しに馳せ下ろうとして、平家の軍勢をはったとにらんでいる長南忠春という武士が見えているのである。

芳虎は、主な武士はすべて姓名を書込んでいるから、もちろん史実に基づいて武将の名を書留めたものであろう。

この忠春という武士は、別に上総次郎長南忠春が正式の名前で1189年頼朝に追われて義経が奥州の藤原氏を頼って下った時に、義経に従った数少ない従者の中に含まれていたとする口碑もある。

義経の家臣たちが、長南忠春を含め衣川で全員討死するまで終始一貫、義経を見捨てたり裏切ったりしなかったことは大すじとしてまちがいはないと思う。

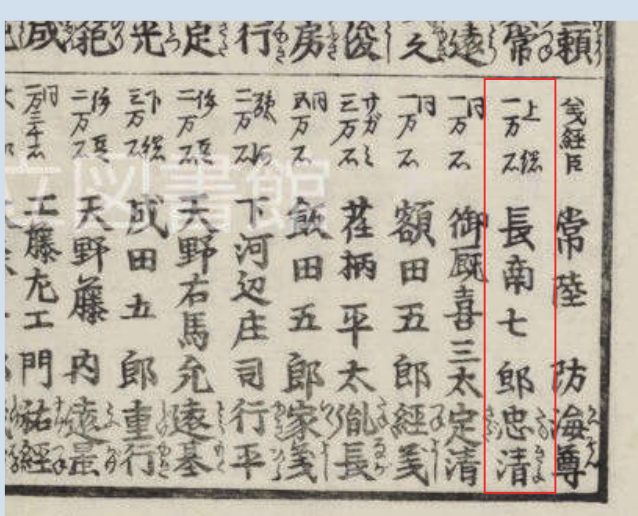
当初から義経は頼朝の武将の一人として第一線の戦闘を専門に命ぜられ、忠実に実行したが部下に対しては報いるものを持ってはいなかった。それにもかかわらず、家臣団が文字ど

おり生命を捧げて悔いなかったらしいことは、驚くに値するのである。義経の人格に、なにかそうさせるものが備わっていたのであろうか。

長南忠春のその後については、文献もなく単に伝説が残っているだけである。次に船本音羽の手紙の一部を紹介しよう。

「岩手県下閉伊郡田老町青沙里^{あおざり}に長南七郎忠春にかかわる伝説があります。これは私の親友





の歌人で歴史家としても秀れた岩手県山田町の
小林喜代治君（山田の農協預金会長で故人）が
調査したものです。忠春は上総次郎忠春と名の
り義経外数人の者と共に平泉を逃れ南部の閉伊
地方へ潜行しました。この頃この閉伊地方は源
為朝の子頼基の領地であり、頼基の奥方音羽姫
は佐々木四郎高綱の長女だったと伝えられてお
りますから、そこを頼って来たのではないでし
ょうか。その後宮古等の海岸を伝って津軽の竜
飛へ出たと言われますが、忠春は宮古（ここ
には判官館とか九郎の森とか、義経に関する伝説
や古跡が多くあります。）その隣郷田老、現在の
の田老町の青沙里で病のため死亡したと伝えら
れ、それに関した伝説があり、長南城に伝わる
朝日かがやくの謎の歌とほとんど同じ歌が残さ
れ、上総忠春は死ぬ時看取った者へ言い残した
ものと伝えられて来ました。その上因縁とでも
云いましょうか女房サヨの母の父、つまりサヨ



には祖父に当たる人がこの青沙里の旧家万助
大家から出た人で、私もこの家に行き、この歌
のことを聞かれました。」

平家が滅亡して天下を握った頼朝は、“狡兎
死して走狗煮らる”のたとえのように弟義経を
殺し、やがて1190年（文治6）京都に入り
4月に建久と改元、11月には右近衛大将に任
ぜられ、得意絶頂の時代を迎える。1192年
（建久3）頼朝は征夷大將軍に任ぜられ幕府を
開き、鎌倉時代が始まった。

土井兼太郎氏によれば、鎌倉時代に長南七郎
忠清という武士がいたと、次のように記録を留
めている。長南氏は、本姓は何であったか分ら
ぬが、鎌倉幕府初期時代に庁南殿、庁北殿（鎌
倉の南北二館に住む）と称せられた幕府の重職
を勤めた人で、長南七郎忠清（鎌倉武鑑による。
禄高不明）というのがある。此の人は鎌倉幕府
の庁吏として相当の地位を得て、上総長南の地
を領して長南氏を称するに至った。

長南忠清は長南氏の旗頭であり推定12代
位の人であった。長南忠清は幕府の問注所（裁
判所）に勤めて現在の長南町給田すなわち菅原
氏荘園のあとに領地をもっていたとされている。

この下図の浮世絵は一寿齋芳員（歌川芳員）
が描いた作品だが、ここに上総介忠清が登場し
ている。（丸印）もう一人平家の侍大将として
上総介忠清、別名藤原忠清または伊藤忠清が
いるが壇ノ浦の戦いで平家滅亡後、源氏に捕え
られて六条河原で処刑されている。忠清は『長
南氏の研究』でも別名上総忠清と呼ばれた事など



宮古市田老 三王岩

を考えると、この錦絵に登場する人物は長南
七郎忠清で、国司として実際に実務を掌握し
ていた次官を介と呼ぶ事から上総介と呼んで
いたのではないか？

また、船本音羽の「長南氏よもやま咄」に
よれば、長南忠春と忠清は兄弟であったとい
う。すなわら長南氏は少なくとも兄弟2人の
武士と若干の軍勢を部下として送り出して
いたと考えてもいいようである。

鎌倉幕府は、頼朝の非凡な能力によって成
立したが、独裁者の常として周囲の有力者を
恐れるあまり譜代の忠臣はおろか、弟義経ま
で亡ぼしてしまい、千葉広常も殺された後は
政権奪取をねらう北条氏の陰謀に邪魔者は
次々に消されてしまい、頼家、実朝と続いた
将軍も実力はなくいづれも暗殺されて源氏は
亡びてしまった。

参考資料 長南氏の研究他



たちまちに紅蓮の褪せし彼岸花
一年をこの日に集め観菊会
金時の声もするやに枯野かな
山路来て歌うがごとき枯葉騷
鈴なりに今年も実る夫婦柿
御手植えの香淳皇后紅葉かな
二の丸も本丸もまた大紅葉
義経の笛吹く姿秋の出羽
武蔵坊秋の奥州油断なく
刈り取りを明日に控え鎌を研ぐ

長南俊春



会費ありがとうございました

茨城県	長南幸雄	5,000	2019/07/10
京都府	長南喜善	2,000	2019/07/16
山形県	長南賢一	5,000	2019/07/20



平和への願い紡ぐ

鶴岡の長南さんつづれ織りに

横糸で文様を表現する織物「つづれ織り」に取り組んでいる長南光さんが阿弥陀如来などの三尊仏画を完成させた。世界的巨匠・遠藤虚籟（同県出身1890～1963）の代表作に倣い、平和を願う作者の思いを現代に伝えようと3年がかりで戦り上げた。「誰もが気軽に見られる場所に展示したい」と話す。

阿弥陀如来と観世音菩薩、勢至菩薩の仏画で、



写真 長南光さん

虚籟の作品を半分ほどの大きさ（縦100センチ、横30センチ程度）で再現した。まんだら制作に打ち込んでいた虚籟が約10年かけて取り組んだ作品で、阿弥陀如来像はニューヨークの国連本部に寄贈されたことで知られている。

長南さんは約30年前に知人を通じて虚籟の作品を知り、つづれ織りを始めたという。市民がいつでも見られる作品を残したいと虚籟が願っていたとして三尊仏制作に当たった。色糸が尽き、白糸を生かして織ったという勢至菩薩のたたずまいも丁寧に再現した。件品は6月に完成。「10年がかりのつもりだったが、迷いなく制作することができた」と振り返る。戦後の混乱下で虚籟の制作を支えた櫛引地域の天沢寺で13日、関係者十数人が見守る中、開眼供養を行った。庄司良円住職は「思いを受け継ぐことの尊さ。平和への願いが作品の完成につながっている」とねぎらった。展示場所や方法は市を含め、関係者で話し合うという。

2019年9月19日 山形新聞

稲敷広域消防本部より消防協力者表彰

7月3日、阿見消防署に於いて消防協力者表彰式が行われ、協力者4名に稲敷広域消防本部より感謝状が贈呈されました。

この表彰は、3月4日、阿見町竹来中学校体育館でのショートテニスサークルの活動中に、男性が意識を無くした際に、胸骨圧迫・AEDを用いた救命措置や、救急への迅速な通報等の円滑な行動が、人命救助に繋がったことに対して行われました。

（広報あみ8月号）



写真 左から2人目 長南秀則

台風15、19号の被害に遭われた皆様には、衷心より御見舞申し上げます。1日も早い復旧と、日常生活が取り戻せますようお祈り申し上げます。長南町を含む千葉県全体が台風15号のために停電と家の損壊など、かなりの影響があったとの報道がありました。続けて19号の時は心構えがあったとしても、さらに大変なご苦労をされたと思います。また、19号は茨城県北部から東北地方にも被害をもたらしました。被災された皆様には、どうかお体に気を付けて、これから迎える年末年始をお元気で過ごしてください。

